

創造の要件—人間概念とその外の関係について

Requirement of Creation

佐原浩一郎

SAHARA Koichiro

1. 創造と外部性

1.1 信用の再帰モデルとエピステーメー

貨幣が人々の信用によって成立しているように、人間概念についてもまた、それを成立させているのは人々の信用である。このとき「人々の信用」は、それ以前に「人々によって信用されている」ということによって可能になっており、一種の再帰モデルを形成しながら自らを継続させている[1]。つまり、共有され、一般的に受容されるものになっているのでなければ、人間は自らをそう呼んでいるものとして認識することはできない。

わたしたちは産声を上げると、そのとき既に存在し人々によって与えられた信用の下に運用されている人間概念の様々なかたちへと入り込むことによって、環境としての自らを拓げてゆく。そのような環境こそがフーコーによって「エピステーメー」と呼ばれるものであり[2]、わたしたちはそこへ足を踏み入れ、そうした環境がわたしたちを思考させるままに、わたしたちは思考するようになる。ここで留意しておきたいのは、エピステーメーと人間概念が同義であるというわけでは決してなく、人間概念とは、現代のエピステーメーにおいて構造化されていると言うべきであろう。

いずれにしても人間概念は最初からわたしたちの環境であるというわけではなく、わたしたちがこの時代に育つ中でわたしたちの環境となってゆく。そうした環境の中でわたしたちは考え、表現するのだが、そのような考え、表現の大部分は、現代のエピステーメーにおいて予め準備されており、そこからわたしたちへとその都度供給されている。それではまるでわたしたちはエピステーメーによるプログラムを駆動させるための動力であるに過ぎないかのようだ。しかし実際には無数の偶然性や新たな素材がそこへ入り込み、ある時期のエピステーメーはそれ自体を不変のまま保ち続けるということとはできない。

1.2 一義的な場

理性の側からわたしたちを見てみると、理性を巧みに用いることのできないわたしたちは不完全で悠長な存在として見做されるのかもしれない。ところが理性は理性で、また多くの破綻を含んだ状態をその本性としている。人間概念とは、閉じられたひとつの巨大な公理系であるのではなく、限られた範囲に閉じられた無数の公理系、あるいはそれよりは閉じられていない無数のモラルが随意に集合したものだ。それぞれの公理系は常に他の公理系あるいは偶発的な出来事の影響に曝されている。ひとつの公理系が自らの整合性を証明しようとするには、少なからず排他的な思考を働かせなければならない。しかし、排「他」的思考の内には既に「他」が含まれており、「閉じられた」公理系であると言っても、もはや他からの

影響なしに考えることはできないだろう[3]。

「他」と名指されるものが「他」であると認識されるとき、そのような「他」とは、「他」と「他でないもの」がそれぞれ別のものであると見做されるということを成立させるような場においてのみ見出される。つまり、そのとき「他」と「他でないもの」は共依存の関係に置かれていて、それぞれは一義的な性質を持つ場におけるひとつひとつの属性のようなものとして認められることとなる。事態はここでたちどころにスピノザ的なものとなり、それぞれの公理系は権威の体系から引き離されると同時に、わたしたちの認識そのものが流動性の中に投げ込まれる。

流動性もしくは偶然性をその本性とするこのような一義的な場において、一般的受容性は破られる。そしてこの一義的な場は常にわたしたちの場であり、「人々の信用」なるものは日常的に崩壊しているのである。しかしわたしたちが思考を始めると、言語を筆頭とした「人々の信用」を前提とする手段を用いるなどする中で、初めはそれが道徳的な思考ではなかったとしても、この時代のエピステーメーの中で次第に人間的な概念をよすがとするようになり、道徳的な限定へと自らを閉じてゆくこととなる。

1.3 わたしたちの傍にある世界

一義的な場は時間と密接に関わる場、あるいは一般的な意味での「時間」というものとは異なるのかもしれないが、いずれにしてもある種の時間的なものに関わる場である。信用の再帰モデルに端を発する道徳への服従は、そうした時間的なものによって退けられる。わたしたちに創造が可能となるのはそのような場である。

確認しておかなければならないのは、そのような場、時間的な、一義的なそのような場とは、人間理性に創造をもたらすものであると同時に、創造の阻止が持続されるということが可能になるような場でもある。創造とはひとつの偶然性であり、理性の外をその出自とする。外部はのべつ創造的なのだ。

ここで重要なのは思考のあり方であり、理性の自己言及性である。即ち、理性における閉塞性を、その理性自身が認められるか否かによって、外部の創造性を理性の側へと導入できるかどうか決定される。しかしそのとき創造は瞬く間にそれ自体を理性化し、閉じていこうとする力に遭遇する。現代の創造の多くは、こうした既に無力化された創造を指してそのように呼ばれている。

例えば、破調や不協和、情動あるいは脆弱性の肯定こそがわたしたちに創造をもたらすと言うことが可能であるかもしれない。しかしおそらくそれは理性の側からの光景で、ここで立場を変えて、そもそもそのようなことは当然の了解であるとするならば、理性あるいは人間概念に対する理解のほうの問題となるのではないだろうか。一人の人間が言語を習得し、エピステーメーに入り込み、人間概念の限定の中で理性的に振る舞うようになる以前の状態を、わたしたちは既に失っているのではない。そうした始原的な状態は薄皮一枚隔てたところに存在していて、それがわたしたちに生をもたらす、創造的であることを可能としている。

実体とは確かなイメージではなく、むしろ不確かであるという確実性である。もし「世界」という語彙をそのような実体を指すものとして用いるならば、人間概念の内側には世界など存在していないということになるだろう。繰り返すように、わたしたちは世界を喪失したのではなく、世界は常にわたしたちの傍らにある。それゆえ、世界は人間概念の確実性を絶えず脅かし続けているとすることができる。わたしたちはそのような世界と接しており、原理

的には創造的な存在なのである。

2. 昆虫食と創造

IAMAS（情報科学芸術大学院大学）教授の前林明次によって、2014 年度よりプロジェクト「これからの創造のためのプラットフォーム」が開始された。2014 年度の活動はレクチャーシリーズの開催を主とし、「創造」をテーマに様々な領域の実践者がそこへ講師として招かれた。

2.1 虫を食さない文化と食する文化

ここではレクチャーシリーズのテーマの一つであった昆虫食を取り上げ、考察してみたい。虫を食する文化と食さない文化がある。虫を食さない文化から見て、虫を食する文化はどこか遠い世界の話のようである。虫を食する文化から食さない文化を見ても同様に感じられるのかもしれない。日本では全国的に昆虫食の文化が存在する。しかし、それと同時に昆虫を食している人数は極めて少ない。他国と比較して日本では近年とりわけ虫を忌避するような感覚が流通している。「ジャポニカ学習帳」の表紙の写真に昆虫が使用されなくなったことや、インスタント食品に昆虫が混入していたとされる報道が続いたことはまだ記憶に新しい。

ヒトはそもそも雑食の動物なので、先天的には虫を食する。かつてはおそらくすべての文化で虫は食されていただろう。しかし第二次世界大戦後、日本の文化は虫を忌避する方向へと舵を切る。虫は害悪であるというイメージが、新たな市場を開拓し、それが今やスーパーの一角に欠かせなくなるほどに巨大化したのである。虫を食さない文化は、このような社会の動静と相俟って 20 世紀の後半に形成された。

食の問題もまた、当然先に述べた人間概念と切り離すことはできない。強大な道德であるグローバリズムが、食を巡る環境を今少しずつ飲み込みつつある。例えば FAO（国際連合食糧農業機関）は、「未来の食料危機の回避」を表向きの理由に、昆虫食を推し進めている。しかしグローバリズムの要請や、昆虫食の市場を開拓するといったおそらく本来的な意図がそこに隠し切れず露呈されていて、しかもそのように隠し切れていないことについて自覚的でならないように感じられる。現状とはそのようにして作り上げられる。一方と他方がしのぎを削り、隠し切らなければ足元をすくわれかねないような状況であれば、そのことについて無自覚でいることはできないだろう。本音の露呈に対して彼らが無自覚のままにさせているものがあるとすれば、それは他でもない、彼らにとっての危険性の非存在とも言うべき、「資本主義」の強大な権力である。

前述のプロジェクト「これからの創造のためのプラットフォーム」主催のレクチャーで講師を務めた立教大学の野中健一教授によると、当初 FAO では虫をパウダーにして食するという方向で昆虫食の普及が探られていたが、最終的には虫であることを隠すのではなく、そのままの姿で食するという方向でまとまったという。こうした判断には、昆虫を単に栄養価に還元し、食事の際に昆虫を意識させないような昆虫食のあり方を見直し、世界各地に存在する文化としての昆虫食を拡大させようという意図が垣間みられる。そしてそれは互いの譲歩がかたちになったということで、一つの成果である。

しかしそのような譲歩は常に資本主義の側の認可が前提となる。おそらくそこでは、そうしたかたちで昆虫食が普及することで、資本主義の側において将来的な資本の増加が見込まれていて、それが横ばいであれば認可されることはなかったのかもしれない。資本主義とい

うものが今全世界的に人々の環境としてわたしたちを取り巻いている以上、それについての考慮なしに多数の意見が集約するということは考えにくい。

2.2 「主観的な理解」の一種としての「客観的な理解」

言葉を文法に従って並べると、そうして出来上がった文は定まった意味を持つ。そうであるにも関わらず、一つの文はすべての人に同様に理解されるわけではなく、むしろすべての人がそれを異なったかたちで理解する。つまり言葉の理解とは、それを理解する個体の環境によってその凡そが決定されるのである。

実のところ理性というものは、環境へ依拠する以外に機能することはないのではないだろうか。人が理性によって思考しようとするとき、理性は既知の道筋を辿る。偏りのない、一定の言葉の意味に従った客観的な理解の成立は困難であり、どこまでも人はそれぞれの後天的な環境の質を免れることはできない。「客観的な理解」すらも、言わば各々で異なる「主観的な理解」の一種となるだろう。

インターネットの登場以降、その内部で徐々に客観的な理解の可能性が開かれてきた兆候が感じられもする。しかし、それは現在という限られた位置からの観察にのみ許された表象であり、人がまだ十分にインターネットの可能性を理解していないがゆえの「単調さ」であるに過ぎない。ウィトゲンシュタインによって特権視された科学と論理の言語もまた、前提としての人々の信用や、それが既知のものであることによる説得だということを免れることはできない。単純な加法ですら、その受容はその都度揺れているのである。

従って、わたしたちのあいだにコミュニケーションの基盤が共有されているとはいいがたいということが事実なのだ。それどころか、コミュニケーションとは、対話の可能性の誤った道筋であるとも言える。わたしたちが流通させている記号は、本来的には伝言ゲーム的なものである。新たに対話の可能性を開くとするならば、言語とそれについての各々の理解とのあいだの不均衡を交換するということに突破口があるのではないだろうか。しかしそれでも資本主義はその権力にまかせて、あたかも専制君主のようにコミュニケーションが機能しているという態度を譲ることはない。

「昆虫食」を自らの脅迫的なコミュニケーションの中で扱おうとする資本主義と、そのようなコミュニケーションの外で考えようとする人々とが存在する。そして現時点ではそれらを包括するような公理系は、不完全なものを探したとしてもどこにも見つかることはない。互いの折衝によって妥協案が捻出されるわけだが、それは双方が互いの言い分を了解した結果ではなく、自らの言い分について自らが思考を続けることをやめたという結果でしかない。なぜなら、仮に言語のシステムに破綻がなかったとしても、言語の認識となると、非常に恣意的で調整的な場へと舞台を移さなければならないからである。

2.3 経験されたもの、あるいは経験の可能性

昆虫食の普及が目指されているとして、わたしたちにモラルをもたらしている人間概念は、いかにして自らに昆虫を食するという行為を取り込むのだろうか。人間概念の外にあるものが人間概念に加わるというとき、そこでは常に跳躍が必要とされる。それは、通常は閉ざされた場が一時的に開かれるということであり、それに伴って変化が迎え入れられるということである。人間は、人間概念が変化したとき、それが現在そうなっているようになってしまったということ、既に自分たちが経験したものとして、その事実依存する。裁判において

判例が前提となっている現状は、そのような道德の性質と見事なまでに合致している。

昆虫を食したことのない者が初めてそれを口にし、その後昆虫食を自らの理性に含まれるものとして考えるようになるのは、あるいは昆虫というものが食べられるものであると認識するようになるのは、昆虫が食べられるものであるという判断を下すことによってではなく、その判断を下すよりも前に食べることができてしまっているという事実による。しかし、ここで最も重要なのは、昆虫を食したことのない者が、それを口にしようと考え、実際にそうするということのほうだ。日常的には安定している道德が、ある特殊な状況において脆弱化する。そのとき、未だかつて起こりえなかったことが可能となるだろう。

調理された昆虫が皿に盛りつけられ、目の前のテーブルに置かれている。この段階で既に道德は軟化しつつある。このことから明らかであるように、道德の軟化、あるいは硬化、つまり道德のあり方とは、あることが可能であるかどうかということに左右される。例えば、畜産農家にとってどうすればウシが効率的に飼料を食べるのかを考えると、ウシの身体にトウモロコシを流し込む[4]ことが可能な環境が用意されていれば、それを採用する可能性は飛躍的に上昇するだろう。また別の例として、近年道德がかつてないほどに厳格化しているのは、科学技術の発達による潜在的な死の可能性の増大と無関係ではない。

本論考が問題としているのは「人間概念とその外」についてであり、決して「先天性と後天性」でも「自然と人間」でもなければ「資本主義と第三世界」でもない。述べてきたように、わたしたちは人間概念を信仰し、世界を限定するということに余念なく勤しんでいる。同時にわたしたちは人間概念の内側にとどまるものではなく、日常的にその外へ足を踏み入れてもいる。実際のところわたしたちは、生の大部分を人間概念の外に置いているのだということを今一度確認しておこう。

参考文献

1. 浅田彰、『逃走論』、ちくま文庫、1984、p.147
2. ミシェル・フーコー、『言葉と物—人文科学の考古学』、渡辺一民、佐々木明訳、新潮社、1974、p.20
3. ジル・ドゥルーズ+フェリックス・ガタリ、『千のプラト—資本主義と分裂症』(下)、宇野邦一、小沢秋広、田中敏彦、豊崎光一、宮林寛、守中高明訳、河出文庫、2010、p.200-245
4. これからの創造のためのプラットフォーム：考察：「生きるための昆虫食」、
http://sozonoplatform.blogspot.jp/2014/05/blog-post_12.html (2015年1月14日確認)